

御父の家をきよめる神の御子 (宮きよめの本当の目的)

ヨハネ福音書2:12-25

【新改訳2017】

- 2:12 その後イエスは、母と弟たち、そして弟子たちとともにカペナウムに下って行き、長い日数ではなかったが、そこに滞在された。
- 2:13 さて、ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。
- 2:14 そして、宮の中で、牛や羊や鳩を売っている者たちと、座って両替をしている者たちを見て、
- 2:15 細縄でむちを作って、羊も牛もみな宮から追い出し、両替人の金を散らして、その台を倒し、
- 2:16 鳩を売っている者たちに言われた。「それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家にしてはならない。」
- 2:17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心が私を食い尽くす」と書いてあるのを思い起こした。
- 2:18 すると、ユダヤ人たちがイエスに対して言った。「こんなことをするからには、どんなしるしを見せてくれるのか。」
- 2:19 イエスは彼らに答えられた。「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」
- 2:20 そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかった。あなたはそれを三日でよみがえらせるのか。」
- 2:21 しかし、イエスはご自分のからだという神殿について語られたのであった。
- 2:22 それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばを信じた。
- 2:23 過越の祭りの祝いの間、イエスがエルサレムにおられたとき、多くの人々がイエスの行われたしるしを見て、その名を信じた。
- 2:24 しかし、イエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。すべての人を知っていたので、
- 2:25 人についてだれの証言も必要とされなかったからである。イエスは、人のうちに何があるかを知っておられたのである。

【祈りながら考えよう】

- (1) 「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる」とはどういう意味ですか。
- (2) 宮きよめの本当の目的は何ですか。
- (3) しるしを見て信じた人々に、ご自身をお任せにならなかったのはなぜですか。

【解説】

(1) 過越の祭りの意義

《さて、ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた》
主イエスは、ガリラヤのカナからカペナウムに行かれた後、過越の祭りが近づいてきていたので、エルサレムに上られた。

過越の祭りは、昔、イスラエルの民が出エジプトの夜、イスラエル人の各家でほふった一歳の雄羊の血が入口の柱とかもいかに塗られているのを見て、主の使いが「過ぎ越された」ことに由来する(出エジプト12章)。

過越の祭りは、毎年ユダヤ暦のニサン月の14日(今日の三月下旬から四月中旬)で、その翌日から一週間を「種なしパンの祝い」として守った。



ガリラヤのカナからカペナウムへ

また15日の夜に過越の食事をした。奴隷状態から解放され、紅海を通して荒野、そして最後に約束の地に導かれたことを記念するものである。

(2) 神の家における冒瀆的なわざに対する主の怒り

礼拝のために遠方からエルサレムに来る人々が、お金を持参し、エルサレムでいけにえの牛や羊や鳩を買うことは律法にかなったことである(申14:24-26、出30:13)。

当時、エルサレムの宮には、異邦人の庭というのがあり、異邦人で礼拝したい人々は、そこまで入ることができた。そこには、いけにえ用の「牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちが」が門前市をなしていた。

それをご覧になった主イエスは、細いなわでむちを作り、羊や牛をみな宮から追い出し、両替人の台を引っくり返し、鳩を売る者にこう言われた。

《それをここから持って行け。

わたしの父の家を商売の家にしてはならない》

ここで、主がなさったことの真意は何であったのか。4つ考えられる。

① 聖いものをこの世的なものに変えてしまっていたことへの叱責

異邦人の庭では、彼らがいけにえ用の牛や羊や鳩を売ることに、また外国の貨幣をユダヤの貨幣に変えるための両替屋がいること自体が間違っていたわけではない。

申命記14章24節以下のところでは、牛や羊や鳩を売ること、モーセの律法が定めているし、いけにえ用の動物を連れて来るのは大変で、いけにえ用の動物の検査はなかなか厄介であった。

両替の場合も、出エジプト記30章13節では、モーセの律法は、イスラエルの半シケル貨幣で献金することを定めていたから、これも必要であった。だから、これらの商人がここで店を出しているのは、彼らが勝手にそうしていたのではなく、モーセの律法に従って店を出していたのだと言ってよい。

ところが、そうした聖書に基づいたことでも、その中に、うっかりしていると、世俗的な精神が入ってきて、本来のものが変質してしまうことがある。

それは、祈りにしても、献金にしても、伝道にしても、同様である。本来の祈りが、人を気にする祈りに変質したり、献金も主への心からの感謝のささげ物であるべきものが、時として献金をするを惜しんだり、他の人の目を気にしたり、自己満足の献金に変質したりすることがないとは言えない。

また、伝道にしても同様のことが言える。純粋に滅び行く人への愛からなされるべきものが、恥ずかしいという思いや、やっても人は救われぬからと言い訳して、しなくなることもあるかもしれない。

純粋に神との関係であるべきものの中に、自己中心的なこの世の思惑が入り込んでしまう時、それは本来のものとは変質してしまっているわけであるから変えられなければならない。

② 神の家を商売のために利用し、そこで不正な利得をあげている彼らの貪欲をあばくこと

神の教会のものを大事に扱わなければならない。それをいいかげんにして、主の教会に損害を与えているようなことがあれば、大きな罪を犯していることになる。このことはすべての信者に当てはまる。

主の教会から何かうまい汁を吸おうとするだけでなく、主の教会のために、時間も、お金も才能も本当にささげているかということが問われている。

③ ここで店が開かれている場所は、異邦人が礼拝する場所である

異邦人の庭で、店を開き、商売をしていたら、異邦人は心を静めて礼拝することができるか。時の大祭司アンナスがその場所で店を開き、商売することを許したのは、異邦人の礼拝を妨害させていたようなものである。

今日の私たちにこれを当てはめてみると、求道者や新来者が来ても、その人々に対して全く無関心であったり、一言も声をかけず、親しい者たちだけで親しんで十分な対応をせず、寂しく帰って行かせるようなもの。主はここで、伝道を妨げる思いに対して敢然と(困難や危険を伴うことは覚悟のうえで)立ち向かわれた。

④ メシア預言の成就

「あなたの家を思う熱心が私を食い尽くす」という詩篇69篇9節が成就しようとしていた。このメシア預言が現実に成就したのは、主イエスの十字架上の死の時であり、弟子たちがこのメシア預言の成就を本当に理解したのも、十字架上の死の後、復活されてからのことであった。



宮きよめをなさるイエス

この時、弟子たちがこのメシア預言を思い出したのは、主イエスの毅然とした態度（物事に動じない態度）に、やがて死ななければならない運命を連想することができたからであった。

（3）ご自分の死と復活に関する予告

宮きよめの出来事が意味していることは、以上の4つだけであったのか。そうだとすると、この宮きよめの出来事に続くユダヤ人の指導者たちと主イエスとの問答を、ヨハネがここに記している意図が十分に理解されない。

ユダヤ人の指導者たちは、商売人を神殿から追い払った主の権限に不審を抱いた。これだけのことをするからには、どのような権威を持っているのかと詰め寄った。権威のしるしを示せと言う。すると主は、彼らにこう答えておられる。

「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」

彼らは、主がご自分の体について言われたことを理解できず、そこに建っていた神殿のことだと思い、こう答えた。

「この神殿は建てるのに四十六年かかった。あなたはそれを三日でよみがえらせるのか。」

彼らが思いつく神殿と言えは、その当時建っていたヘロデの神殿しかなかった。この神殿を建造するためにすでに46年が経過していた。それを三日でよみがえらせる、というのはだれにとっても不可能に決まっている、と彼らは思った。

使徒ヨハネは明確に「イエスはご自分のからだという神殿について語られたのであった」と述べ、イエスがご自分の復活について言及されたことを教えている。

（4）宮きよめの本当の目的

主がここで示しておられる「しるし」というのは、三日目に死人の中からよみがえるということである。このことと宮きよめとは、どのように関係するのか。

主が宮きよめをなさった本当の目的は、ただ単に神の家を商売の家とする不正をとがめておられるのではなく、宮の礼拝に関わる律法を廃棄して、新しい礼拝にきよめるといこと、つまり礼拝の革命にあった。

ヨハネ4章23節で、主イエスは、サマリヤの女に対して、

「まことの礼拝者たちが、御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。

父はそのような人たちを、ご自分を礼拝する者として求めておられるのです」（新改訳2017）

「まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。

父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである」（口語訳）

「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。

なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ」（新共同訳）

と言われた「まことの礼拝（the true worship）」である。

それは、主イエス・キリストが十字架上で永遠の贖いの死を成し遂げられ、三日目によみがえられることによって、旧約の動物の犠牲による礼拝を廃された時に成就した。

今日、私たちは旧約時代のような動物の犠牲をささげることによって礼拝をするのではなく、主イエス・キリストの十字架上の死と復活を土台とした「まことの礼拝」をささげることができるわけである。

（5）偽の弟子と本物の弟子

《過越の祭りの祝いの間、イエスがエルサレムにおられたとき、多くの人々が

イエスの行われたしるしを見て、その名を信じた。

しかし、イエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。

すべての人を知っていたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。

イエスは、人のうちに何があるかを知っておられたのである》

本当のキリスト者とはどういうものなのか。あんなにりっぱな証しをしていた人、あんなによく伝道や奉仕をしていた人が、時として教会を去り、信仰をなくしてしまうことがある。しかし、それは何も今日だけではなく、初代教会にもあったことで、別に不思議に思う必要はないかもしれない。

①偽りの弟子たち

主イエスが五千人以上の人々にパンを食べさせる奇蹟をなさった翌日、いのちのパンの説教をされると、それを聞いていた弟子たちの中の多くが、「これはひどい話だ。だれが聞いていられるだろうか」と言い、「弟子たちのうちの多くの者が離れ去り、もはやイエスとともに歩もうとはしなくなった」（ヨハネ6:66）と、聖書は記している。

パウロもそういう人々について彼の手紙の中で言及している。「ある人たちは健全な良心を捨てて、信仰の破船に

あいました。その中には、ヒメナイとアレクサンドロがいます」（Ⅰテモテ1:19-20）「デマスは今の世を愛し、私を見捨ててテサロニケに行ってしまいました」（Ⅱテモテ4:10）

初代教会においても、こうした悲しむべきことはあったようで、ヨハネはその第1の手紙において、そのようなことについての説明をしている。

「彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。

もし仲間であったなら、私たちのもとに、とどまっていたでしょう。しかし、出て行ったのは、

彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためだったのです」（Ⅰヨハネ2:19）

②主に信用されなかった人々

主が公生涯の最初の過越の祭りの間、そこで奇蹟をなさり、それを見た多くの人々が主イエスを信じたのであるが、イエスは「自分をお任せにならなかった」

ここで「お任せになる」と訳されている言葉は、ギリシャ語では、そのすぐ前の「信じた」と訳されている言葉（πιστεύω/ピステノー）と同じ。「信頼する」という意味であるから、ここでは主イエスが彼らを信頼されなかったということである。

どうして、主が彼らの信仰を確かなものと信頼されなかったのかと言うと、「すべての人を知っていた」から。また、イエスはご自身で、「人のうちに何があるかを知っておられ」た。

ここに、私たちと主イエスとの違いがある。「人はうわべを見るが、主は心を見る」（Ⅰサムエル16:7）と聖書が教えているように、主イエスは、私たち人間とは違って、人の心をご覧になる。

主イエスの奇蹟を見て信じた人々の信仰を、主が信用されなかったのは、彼らの信仰がまだ本物ではないことを見抜いておられたからである。

③本当の弟子となる道

そこで、主の本当の弟子となるには、どうしたらよいのかと言うと、主はご自分を信じたユダヤ人たちに、次のように言っておられる。

「イエスは、ご自分を信じたユダヤ人たちに言われた。

『あなたがたは、わたしのことばにとどまるなら、本当にわたしの弟子です』（ヨハネ8:31）。

これと同じようなことを言われた主の御言葉を見てみると、主はぶどうの木の譬で、次のように言っておられる。

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら、

何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。あなたがたが多くの実を結び、

わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになります」（ヨハネ15:7-8）

これらの個所から教えられることは、主イエス・キリストの弟子となるには、主を信じるところから始まるが、それだけで終わらず、主の御言葉に基づき、主との交わりの中にあり続け、実を結ぶようになるということである。

主から離れては何1つできないことを心に銘記し、主と堅く結びつき続けることが必要である。その時、主が私たちを通して豊かな実を結んでくださる。

聖書において教えられていることは、ただ信じるということだけではない。主の弟子となることである。主の宣教大命令と呼ばれているものもそうである。主は十一人の使徒たちに対して、こう命じられた。

「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。

父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを受け、

わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい」（マタイ28:19-20）

ここで使われている主動詞は、「弟子としなさい」である。その内容が「父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを受け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい」である。

つまり、入信と同時に、教育・訓練ということが、主の弟子となるための必須内容である。主イエス・キリストを罪からの救い主と信じるだけでなく、それから続いていく教育・訓練への服従ということが、重要な内容である。教育・訓練を嫌がる人々を、主は信用なさらない。それは、主の弟子とはなり得ない人だからである。

しかし、私たちはまた同時に、主の本当の弟子とされるということが、どれほどすばらしい特権であるかということを、今さらのように思い知らされる。

私たちのような者を、主は信用してくださっているからである。主は信用される者たちの信仰を訓練なさる。

だから、主の訓練を嫌がったり、軽んじてはいけない。

「主はその愛する者を訓練し、受け入れるすべての子に、むちを加えられるのだから」（ヘブル12:6）

「すべての訓練は、そのときは喜ばしいものではなく、かえって苦しく思われるものですが、

後になると、これによって鍛えられた人々に、義という平安の実を結ばせまる」（ヘブル12:11）のである。

ヘロデの神殿

ヘロデの最大の業績は、エルサレム神殿を再建したことだった。前20年に始まり、後64年(ヘロデが死んだ後)になって完成した。神殿再建によって民意を勝ち取り、ローマに感銘を与えようとしたが、どちらもかなわなかった。臣民はヘロデを憎み、後70年、ローマはユダヤの反乱の鎮圧すると、神殿を破壊した。

イスラエルの庭

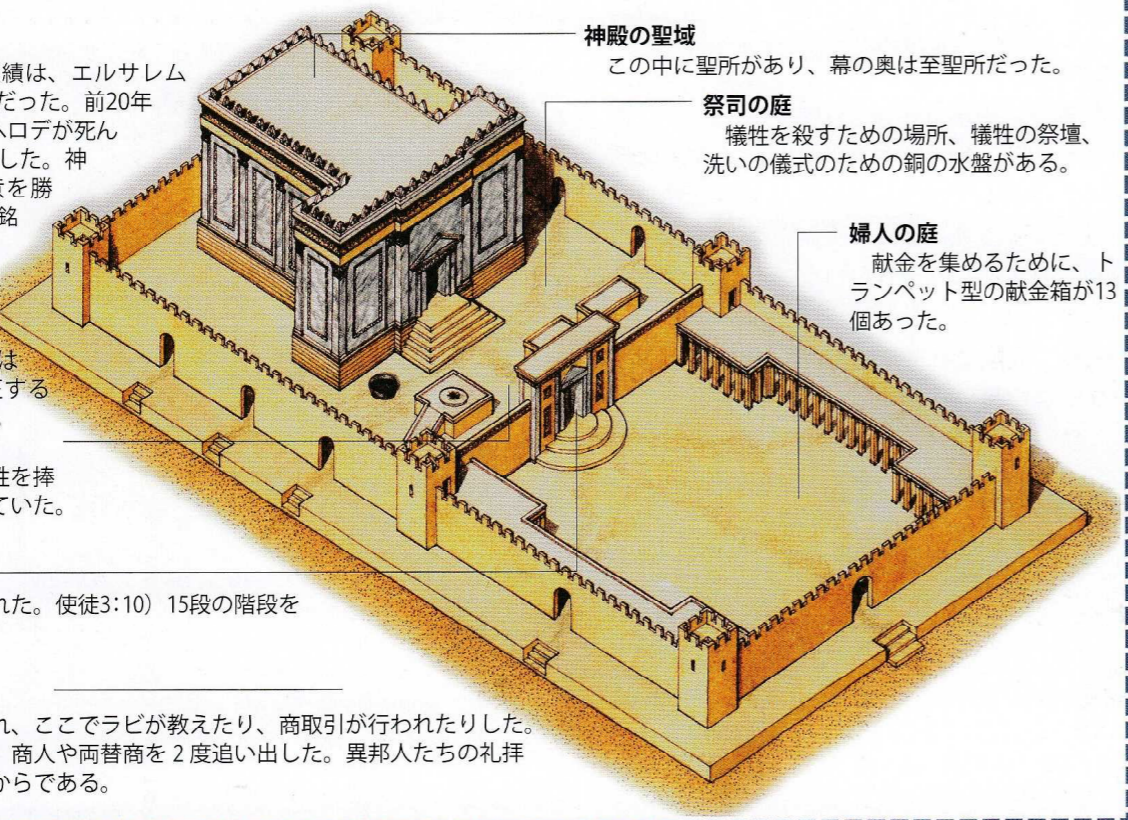
男性の礼拝者が犠牲を捧げる場所に指定されていた。

ニカノル門

(美しの門とも呼ばれた。使徒3:10) 15段の階段を上って、門に至る。

異邦人の庭

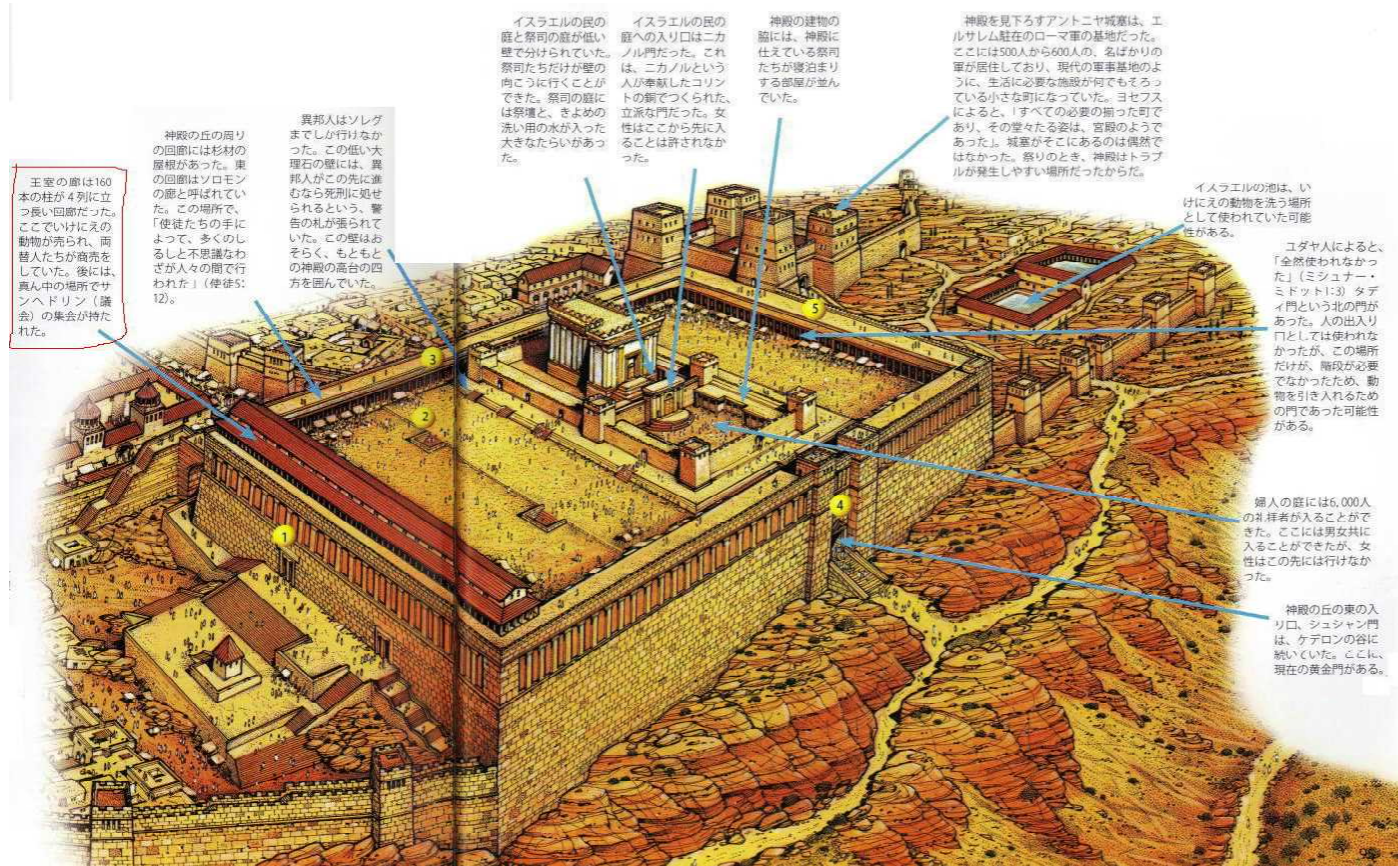
柱廊によって囲まれ、ここでラビが教えたり、商取引が行われたりした。イエスもここで教え、商人や両替商を2度追い出した。異邦人たちの礼拝を彼らが妨げていたからである。



神殿の聖域
この中に聖所があり、幕の奥は至聖所だった。

祭司の庭
犠牲を殺すための場所、犠牲の祭壇、洗いの儀式のための銅の水盤がある。

婦人の庭
献金を集めるために、トランペット型の献金箱が13個あった。



王室の庭は160本の柱が4列に立つ高い回廊だった。ここでいけにえの動物が売られ、両替人たちが商売をしていた。後には、真ん中の場所でサンヘドリン(議会)の集會が持たれた。

異邦人はソレグまでしが行けなかった。この低い大壁の壁には、異邦人がこの先に進むなら死刑に処せられるという、警告の札が張られていた。この庭はおよそ、もともと神殿の東の四方を囲んでいた。

イスラエルの民の庭と祭司の庭が低い壁で分けられていた。祭司たちだけが壁の向こうに行くことができた。祭司の庭には祭壇と、きよめの洗い用の水が入った大きなたらいがあった。

イスラエルの民の庭への入り口はニカノル門だった。これは、ニカノルという人が奉獻したコリントの銅で作られた、立派な門だった。女性はこの先から先に入ることは許されなかった。

神殿の建物の脇には、神殿に仕えている祭司たちが寝泊まりする部屋が並んでいた。

神殿を見下ろすアントニヤ城塞は、エルサレム駐在のローマ軍の基地だった。ここには500人から600人の、名ばかりの軍が居住しており、現代の軍事基地のように、生活に必要な施設が何でもそろっている小さな町になっていた。ヨセフによると、「すべての必要の備った町であり、その壁々たる姿は、宮殿のようであった」。城塞がそこにあるのは偶然ではなかった。祭りとき、神殿はトランプルが発生しやすい場所だったからだ。

イスラエルの池は、いけにえの動物を洗う場所として使われていた可能性がある。

ユダヤ人によると、「全然使われなかった」(ミシュナー・ミドット1:3) ヌディ門という北の門があった。人の出入り口としては使われなかったが、この場所だけが、階段が必要でなかったため、動物を引き入れるための門であった可能性がある。

婦人の庭には6,000人の礼拝者が入ることができた。ここには男女共に入ることができたが、女性はこの先には行けなかった。

神殿の丘の東の入り口、シュシャン門は、ケデロン谷に続いていた。ここに、現在の黄金門がある。

エルサレムの神殿全体図